三国志（一）

吉川英治全集

第26巻

編纂委員

川口松太郎
川端　康成
小泉　信三
小林　秀雄
佐佐木茂索
獅子　文六

講談社版

吉川英治全集・26　三国志(一)

著　者　吉川英治
装幀者　杉本健吉
発行者　野間省一
発行所　株式会社　講談社　東京都文京区音羽町三ノ一九
電話東京九四二局一一一一(大代表)
振替東京三九三〇
印刷所　凸版印刷株式会社　製本所　大製株式会社
第一刷　昭和四十一年八月十日　第七刷　昭和四十一年十月三日
定価　六百八十円
© 一九六六年　吉川英治

序

三国志は、いう迄もなく、今から約千八百年前の古典であるが、三国志の中に活躍している登場人物は、現在でも中国大陸の至る所にそのまま居るような気がする。――中国大陸へ行って、そこの雑多な庶民や要人などに接し、特に親しんでみると、三国志の中に出て来る人物の誰かしらときっと似ている。或は、共通したものを感じる場合が屢々ある。

だから、現代の中国大陸には、三国志時代の治乱興亡がそのままあるし、作中の人物も、文化や姿こそ変っているが、猶、今日にも生きているといっても過言でない。

×

三国志には、詩がある。

単に尨大な治乱興亡を記述した戦記軍談の類でない所に、東洋人の血を大きく搏つ一種の諧調と音楽と色彩とがある。

三国志から詩を除いてしまったら、世界的といわれる大構想の価値もよほど無味乾燥なものになろう。

故に、三国志は、強いて簡略にしたり抄訳したものでは、大事な詩味も逸してしまうし、もっと重要な人の胸底を搏つものを失くしてしまう惧れがある。

で私は、簡訳や抄略を敢てせずに、長篇執筆に適当な新聞小説にこれを試みた。そして劉玄徳とか、曹操とか関羽、張飛その他、主要人物などには、自分の解釈や創意をも加えて書いた。随所、原本にない辞句、会話なども、わたくしの点描である。

×

いう迄もなく三国志は、中国の歴史に取材しているが、正史ではない。けれど史中の人物を巧妙自在に拉して活躍させ、後漢の第十二代霊帝の代（わが朝の成務天皇の御世、西暦百六十八年頃）から、武帝が呉を亡す太康元年までの凡そ百十二年間の長期に亙る治乱が書いてある。構想の雄大と、舞台の地域の広さは、世界の古典小説中でも比類ないものといわれている。登場人物なども、審らかに数えたなら何千何万人にものぼるであろう。しかも、是に加うるに中国一流の華麗豪壮な調と、哀婉切々の情、悲歌慷慨の辞句と、誇張幽幻な趣きと、拍案三嘆の熱とを以て縷述されてあるので、読む者をして百年の地上に明滅する種々雑多な人間の浮沈と文化の興亡とを、一巻に偲ばせて、転深思の感慨に耽らしめる魅力がある。

×

見方に依れば三国志は、一つの民俗小説ともいえる。三国志の中に見られる人間の愛慾、道徳、宗教、その生活、又、主題たる戦争行為だとか群雄割拠の状などは、宛ら彩られた彼の民俗絵巻でもあり、その生々動流する相は、天地間を舞台として、壮大なる音楽に伴って演技された人類の大演劇とも観られるのである。

×

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

現在の地名と、原本の誌す地名とは、当然時代に依る異いがあるので、分っている地方は下に註を加えておいた。分らない旧名もかなりある。又、登場人物の爵位官職など、ほぼ文字で推察のつきそうなのはその儘用いた。余りに現代語化しすぎると、その文字の持っている特有な色彩や感覚を失ってしまうからである。

×

原本には『通俗三国志』『三国志演義』その他数種あるが、私はそのいずれの直訳にも依らないで、随時、長所を択って、わたくし流に書いた。これを書きながら思い出されるのは、少年の頃、久保天髄氏の演義三国志を熱読して、三更四更まで燈下にしがみついていては、父に寝ろ寝ろと云って叱られたことである。本来、三国志の真味を酌むにはこの原書を読むに如くはないのであるが、今日の読者にその難渋は耐え得ぬことだし、又、一般の求める目的も意義も、大いに異うはずなので、敢て書肆の希望にまかせて再訂上梓することにした。

著　者

目次

序　三
桃園の巻　一六九
群星の巻　三三五
草莽の巻　五〇一
臣道の巻
三国志地図（巻末折込）

さしえ

杉本健吉

三国志

（一）

桃園の巻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

黄巾賊

一

後漢の建寧元年のころ。

今から約千七百八十年ほど前のことである。

一人の旅人があった。

腰に、一剣を佩いているほか、身なりはいたって見すぼらしいが、眉は秀で、唇は紅く、とりわけ聡明そうな眸や、豊な頬をしていて、つねにどこかに微笑をふくみ、総じて賤しげな容子がなかった。

年の頃は二十四、五。

草むらの中に、ぽつねんと坐って、膝をかかえ込んでいた。

悠久と水は行く——

微風は爽やかに鬢をなでる。

涼秋の八月だ。

そしてそこは、黄河の畔の——黄土層の低い断り岸であった。

『おーい』

誰か河でよんだ。

『——そこの若い者ウ。なにを見ているんだい。いくら待っていても、そこは渡舟の着く所じゃないぞ』

小さな漁船から漁夫が云うのだった。

青年は、笑靨を送って、

『ありがとう』と、少し頭を下げた。

漁船は、下流へ流れ去った。けれど青年は、同じ所に、同じ姿をしていた。膝をかかえて坐ったまま遠心的な眼をうごかさなかった。

『おい、おい、旅の者』

こんどは、後を通った人間が呼びかけた。近村の百姓であろう。ひとりは鶏の足をつかんで提げ、ひとりは農具を担いでいた。

『——そんな所で、今朝からなにを待っているんだね。このごろは、黄巾賊とかいう悪徒が立ち廻るからな。役人衆に怪しまれるぞよ』

青年は、振かえって、

『はい、どうも』

おとなしい会釈をかえした。

けれどなお、腰を上げようとはしなかった。
そして、幾千万年も、こうして流れているのかと思われる黄河の水を、飽かずに眺めていた。
（――どうしてこの河の水は、こんなに黄色いのか？）
汀の水を、仔細に見ると、それは水その物が黄色いのではなく、砥石を粉に砕いたような黄色い沙の微粒が、水に混っていちめんに躍っているため、濁って見えるのであった。
『ああ……、この土も』
青年は、大地の土を、一つかみ掌に掬った。そして眼を――はるか西北の空へじっと放った。
支那の大地を作ったのも、黄河の水を黄色くしたのも、みなこの沙の微粒である。そしてこの沙は中央亜細亜の沙漠から吹いて来た物である。まだ人類の生活も始まらなかった何万年も前の大昔から――不断に吹き送られて、積り積った大地である。この広い黄土と黄河の流れであった。
『わたしの御先祖も、この河を下って……』
彼は、自分の体に今、脈搏っている血液がどこから来たか、その遠い根元までを想像していた。
支那を拓いた漢民族も、その沙の来る亜細亜の山岳を越えて来た。そして黄河の流れに添いつつ次第に殖え、苗族という未開人を追って、農業を拓き、産業を起し、ここに何千年の文化を植えて来たものだった。
『御先祖さま、みていて下さいまし。いやこの劉備を、鞭打って下さい。劉備はきっと、漢の民を興します。漢民族の血と平和を守ります』
天へ向って誓うように、劉備青年は、空を拝していた。
するとすぐ後へ、誰か突っ立って、彼の頭から呶鳴った。
『うさんな奴だ。やいっ、汝は、黄巾賊の仲間だろう？』

二

劉備は、おどろいて、何者かと振かえった。
咎めた者は、
『どこから来たっ』と、彼の襟がみをもう用捨なく摑んでいた。
『……？』
見ると、役人であろう、胸に県の吏章をつけている。近頃は物騒な世の中なので、地方の小役人までが、平常でもみな武装していた。二人のうち一名は鉄弓を持ち、一名は半月槍を抱えていた。
『涿県の者です』
劉備青年が答えると、
『涿県はどこか』と、たたみかけて云う。
『はい、涿県の楼桑村（現在・京漢線の保定北京間）の生れで、今でも母と共に、楼桑村に住んでおります』
『商売は』
『蓆を織ったり簾を製って、売っておりますが』
『なんだ、行商人か』
『そんなものです』

『だが……』

と、役人は急に汚い物から退くように襟がみを放して、劉備の腰の一剣をのぞきこんだ。

『この剣には、黄金の佩環に、琅玕の緒珠が提がっているのではないか、蓆売には過ぎた刀だ。どこで盗んだ？』

『これだけは、父の遺物で持っているのです。盗んだ物などではありません』

素直ではあるが、凛とした答えである。役人は、劉備青年の眼を見ると、急に眼をそらして、

『しかしだな、こんなところに、半日も坐りこんで、一体何を見ておるのか。怪しまれても仕方があるまい。——折も折、ゆうべもこの近村へ、黄巾賊の群が襲せて、掠奪を働いて逃げた所だ。——見るところ大人しそうだし、賊徒とは思われぬが、一応疑ってみねばならん』

『ごもっともです。……実は私が待っているのは、今日あたり江を下って来ると聞いている洛陽船でございます』

『ははあ、誰か、身寄の者でもそれへ便乗して来るのか』

『いいえ、茶を求めたいと思って。——待っているのです』

『茶を』

役人は眼をみはった。

彼等はまだ茶の味を知らなかった。茶という物は、瀕死の病人に与えるか、よほどな貴人でなければ喫まないからだった。それほど高価でもあり貴重に思われていた。

『誰に喫ませるのだ。重病人でもかかえているのか』

『病人ではございませんが、生来、私の母の大好物は茶でございます。貧乏なので、滅多に買ってやることもできませんが、一両年稼いで蓄めた小費もあるので、こんどの旅の土産には、買って戻ろうと考えたものですから』

『ふーむ。……それは感心なものだな。おれにも息子があるが、親に茶を喫ませてくれるどころか——あの通りだわえ』

二人の役人は、顔を見合せてそう云うと、もう劉備の疑いも解けた容子で、何か語らいながら立ち去ってしまった。

陽は西に傾きかけた。

茜ざした夕空を、赤い黄河の流れに対した儘、劉備は又、黙想していた。

と、軈て、

『おお、船旗が見えた。洛陽船にちがいない』

彼は初めて草むらを起った。そして眉に手をかざしながら、上流のほうを眺めた。

三

ゆるやかに、江を下って来る船の影は、春く陽を負って黒く、徐々と眼の前に近づいて来た。

ふつうの客船や貨船とちがい、洛陽船は一目でわかる。無数の紅い竜舌旗を帆ばしらに翻えし、船楼は五彩に塗ってあった。

『おうーい』

劉備は手を振った。

しかし船は一個の彼に見向きもしなかった。
徐ろに舵を曲げ、スルスルと帆を下ろしながら、黄河の流にまかせて、そこからずっと下流の岸へ着いた。
百戸ばかりの水村がある。
今日、洛陽船を待っていたのは、劉備ひとりではない。岸にはがやがやと沢山な人影がかたまっていた。驢を曳いた仲買人の群だの、鶏車と呼ぶ手押車に、土地の糸や綿を積んだ百姓だの、獣の肉や果物を籠に入れて待つ物売だの――すでにそこには、洛陽船を迎えて、市が立とうとしていた。
なにしろ、黄河の上流、洛陽の都には今、後漢の第十二代の帝王、霊帝の居城があるし、珍しい物産や、文化の粋は、ほとんどそこで製られ、そこから全支那へ行きわたるのである。
幾月かに一度ずつ、文明の製品を積んだ洛陽船が、この地方へも下江して来た。そして沿岸の小都市、村、部落など、市の立つところに船を寄せて、交易した。
ここでも。
夕方にかけて、怖しく騒がしく又あわただしい取引が始まった。
劉備は、その喧ましい人声と人影の中に立ち交じって、まごついていた。彼は、自分の求めようとしている茶が、仲買人の手に這入ることを心配していた。一度、商人の手に移ると、莫大な値になって、とても自分の貧しい嚢中では購えなくなるからであった。
またたく間に、市の取引は終った。仲買人も百姓も物売たちも、三々五々、夕闇へ散ってゆく。
劉備は、船の商人らしい男を見かけてあわててそばへ寄って行った。
『茶を売って下さい、茶が欲しいんですが』
『え、茶だって？』
洛陽の商人は、鷹揚に彼を振向いた。
『生憎と、お前さんに頒けてやるような安茶は持たないよ。一葉幾値というような佳品しか船にはないよ』
『結構です。たくさんは要りませんが』
『おまえ茶を喫んだことがあるのかね。地方の衆が何か葉を煮て喫んでいるが、あれは茶ではないよ』
『はい。その、ほんとの茶を頒けていただきたいのです』
彼の声は、懸命だった。
茶がいかに貴重か、高価か、又地方にもまだ無い物かは、彼もよく弁えていた。
その種子は、遠い熱帯の異国からわずかに齎されて、周の代にようやく宮廷の秘用に嗜まれ、漢帝の代々になっても、後宮の茶園に少し摘まれる物と、民間の極く貴人の所有地に稀れに栽培された位なものだとも聞いている。
又別な説には、一日に百草を嘗めつつ人間に食物を教えた神農は度々毒草に中たったが、茶を得てからこれを嚙むとたちまち毒を解したので、以来、秘愛せられたとも伝えられている。
いずれにしろ、劉備の身分でそれを求めることの無謀は、よく知っていた。

――だが、彼の懸命な面持と、真面目に、欲する理を話す態度を見ると、洛陽の商人も、やや心を動かされたとみえて、

『では少し頒けてあげてもよいが、お前さん、失礼だが、その代価をお持ちかね？』と訊いた。

四

『持っております』

彼は、懐中の革嚢を取出し、銀や砂金を取交ぜて、相手の両掌へ、惜しげもなくそれを皆あけた。

『ほ……』

洛陽の商人は、掌の上の目量を計りながら、

『あるねえ。然し、銀があらかたじゃないか。これでは、佳い茶はいくらも上げられないが』

『何程でも』

『そんなに欲しいのかい』

『母が眼を細めて、欣ぶ顔が見たいので――』

『お前さん、商売は？』

『蓆や簾を作っています』

『じゃあ、失礼だが、これだけの銀を蓄めるにはたいへんだろ』

『二年かかりました。自分の食べたい物も、着たい物も、節約して』

『そう聞くと、断れないな。けれどとても、これだけの銀と替えたんじゃ引合わない。なにか他にないかね』

『これも添えます』

劉備は、剣の緒に提げている琅玕の珠を解いて出した。洛陽の商人は琅玕などは珍しくない顔附きをして見ていたが、

『よろしい。おまえさんの孝心に免じて、茶と交易してやろう』

と、軈て船室の中から、錫の小さい壺を一つ持って来て、劉備に与えた。

黄河は暗くなりかけていた。西南方に、妖猫の眼みたいな大きな星がまたたいていた。その星の光をよく見ていると虹色の暈がぼっとさしていた。

――世の中がいよいよ乱れる凶兆だ。

と、近頃しきりと、世間の者が怖がっている星である。

『ありがとうございました』

劉備青年は、錫の小壺を、両掌に持って、やがて岸を離れてゆく船の影を拝んでいた。もう瞼に、母のよろこぶ顔がちらちらする。

しかし、ここから故郷の涿県楼桑村までは、百里の余もあった。幾夜の泊りを重ねなければ帰れないのである。

『今夜は寝て――』と、考えた。

彼方を見ると、水村の灯が二つ三つまたたいている。彼は村の木賃へ眠った。

すると夜半頃。

木賃の亭主が、あわただしく起しに来た。眼をさますと、戸外は真っ赤だった。むうっと蒸されるような熱さの中にどこか

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com